「ゆとりと充実」の趣旨にそった学習指導への方向づけ

足利市立富田小学校

Ⅰ　主題設定の理由

教育課程がめざす"人間性豊かな子ども"を育成するには，ゆとりあるしかも充実した学校生活が設定されなければならない。そのためには，学校教育の中核である一時間一時間の授業が子どもたちにとって，目を輝やかせて生き生きと学習できるゆとりあるしかも充実したものになっているか否かが重要な課題となる。

そのため，本校においては"進んで勉強し，深く考える子ども"という学校教育目標のもとに，一時間一時間の授業をゆとりある充実したものにするために，一つには，職員の研修と実践を通して，二つには，職員の研修時間の設定を通して，ねらいにせまる努力をしてきた。

前者においては，授業の中で子どもたちの考える場を吟味して大切にしたり，子どもたちの活動の場をできるだけ設定したりするなどして，子供が目を輝やかせて生き生きと学習できるように児童の側に立った学習指導のあり方を模索し，実践し，修正して又実践するということを昭和５５年４月から授業を通して研究してきた。この研究の方向は多くの学校で行っていることであるとともに，発表に値いするほどの内容でないが，長期間をかけて地味に継続して研究し実践し，又検討し実践しという過程を通して，教師全員の意識が，常に子どもたちが目を輝やかせて生き生きと学習させるというところに達し，実践していることは大へんあたりまえのことであるが，これからの学校教育では，特に重要なことであると思う。

後者の研修の時間の設定については，後で詳しく述べるが勤務時間内に研修の時間を設定して（勤務時間内だけでは研修のきっかけくらいの短時間であるが）上記の趣旨の方向づけができればと思う。

なお，このようにゆとりある充実した学習指導が可能になったら，子どもたちが学習することの喜びを会得し，学校を離れた後も生涯自ら学んで行こうという生涯教育の方向づけになることを期待している。

Ⅱ　教職員の研修と実践

1.　「"子どもたちが目を輝やかせて生き生きと学習する"の学習指導のあり方」の研究

(1)　３年理科「じしゃく」の指導過程を通しての研修

ゆとりの趣旨に沿った子供達の目の輝やく授業設計はどうあったらよいかというねらいで昭和５５年４月２３日に，３年理科「じしゃく」の指導過程を提示し，この学習過程を具体的に検討した。まず，はじめに，この授業過程で子供が目を輝やかせるであろう場面を洗い出した。その結果，

ア．本時の導入の演示の内容が本時のねらいによく迫った事象である上に，子供たちを「あっ」と驚かせるとともに究明してみたいという意欲をかりたてるものである。

イ．金物を磁石にするにはどうすればよいかという予想を立てさせる過程において，子どもの先行経験を非常に大切にしている。

ウ．この予想をたしかめる段階で，まず，個々で考えさせ相互に考え方を十分交換させて，他人の意見や考え方を話し合わせる過程を非常に大切にしている。

エ．くぎが何本ついたか楽しく競争させながらねらいにせまっている。

オ．結論にせまる時も，子どもたちの多様な考え方を十分発表させ，他人の意見を受容させる過程を大切にしている。

カ．次時の予告を本時の発展でおさえ，割合ていねいに扱い興味づけまでせまって調べておこうという気持を起こさせている。……等が指摘された。

(2) 今までの授業で子どもが目を輝やかせて生き生きと学習した場面の話し合い

上記アの話し合いなどを土台にして，各教師が自分の今まで行った授業の中で子ども達が生き生きと目を輝やかせて学習した場面を想起して，どんな授業の内容や流れのときかを話し合った。そして，上記テーマに沿った学習指導をするために，こんなところに力点をおいて授業設計を行うことをひとりひとりの先生方からご意見をいただき，次のようにまとめた。

"子供たちが目を輝やかせて生き生きと学習する"授業設計の視点

ア．子どもの実態（性格・能力・志向・経験等）を実態調査やプレテスト等で調べた上で学習過程を構成し，授業中に子供の経験等を発表させたりして，学習に役立った満足感を大きくする〔浅海教諭〕

イ．目標を指導のプロセスに準じた具体目標にして，上中下くらいの能力層別の到達度を教師がおさえておく。一方，子供には，ひとりひとりの能力に応じた到達目標を持たせ，本時の目標を十分意識させて授業に臨ませる。（例えば，ボールなげ等）〔影山教諭〕

ウ．学習のプロセスにおいて，指導内容によって，一斉・個人・グループなどの学習形態が最も効果的かを十分検討しておき，できるだけ個人・グループの学習形態を多くするようにして授業への参加意欲を高める。（岩上教諭）

エ．指導の場と考えさせる場を明らかにしておき，教える場では適切な資料を準備するし，考させる場では教師は我慢して十分な時間をとる（戸叶・浅海・上武教諭）

オ．問題意識・課題意識を高める。即ち，効果的な演示実験や資料を提示して「あっ」と驚かしたり，疑問を持たせたりして，「よし，調べてみるぞ」「やってみるぞ」という気持にさせる。（西村・岩田・戸叶教諭）

カ．過去の経験や友だちの発言などをもとに，しらべ方や方法や手順等を予想させたり計画させたり発見させたりして，自分達の学習計画を持たせて学習に臨ませる。（岩田・浅海教諭）

キ．子供の活動をできるだけ多くし，体験的な学習を大切にする。例えば，測定・実測・実験・実習・観察・記録・表現・作業・遊び等の場の設定や教室内だけの学習だけでなく，目的と考えあわせて校庭や屋外の学習の機会をどんどん取り入れる。（西村・岩上・野口・上武教諭）

ク．子供の発言や考え方を大切にさせて，他人の意見ややり方を受容させる。

(ア) 代表的なA君とB君との発言を比較させて，考え方の同一性や違いを明らかにさせたり，自分の考えと合っているところ似ているところちがっているところなど考えさせたり，A君は非常に良い考え方をしている，自分は今日はここまでしか考えられなかったけれど，A君はもっと先まで考えた，今度は自分もそこまで考えるようにしよう等，自分の考えや

やり方をふりかえって良いものに修正する自己評価の過程を大切にしたい。（上武・新井教諭）

(イ) 児童の相互評価も観点を明らかにしておいて行えるようにしたい。（須賀・高田教諭）

(ウ) グループで助け合って教え合えるような学習訓練を大切にしたい。（須賀・松本教諭）

以上のように，子供達のやりとりを大切にして，教師の計画どおり一時間の授業がスムーズに流れることだけを考えるのでなく，子供とのぎたぎたしたやりとりを十分考えたい。

（戸塚教頭）

ケ．授業の終末に，本時の学習を通して「わかったこと」「感じたこと」をまとめさせること，そしてそれを発表させることにより，学習への参加が能動的になり，まとめられたという自信へつながる。又，まとめるという力にもなるので大切にしたい。（戸叶教諭）

コ．次時の内容について，ある程度，丁寧に知らせる。予備知識が必要な時など児童が進んで事前に調べてくるような興味づけまで持ってゆける知らせ方が必要である。（戸叶・松本教諭）

サ．学習の途中で評価を行い，学習が成立してない子に再指導をしたり，放課後のゆとりの時間を使って学習の遅れがちな子へ手をさしのべたりするなどいろいろ工夫して「わかった」「できた」授業にすることが大切である。（野口教諭・戸塚教頭）

以上のように研修した後，これからの毎日の授業でこれらの視点を大切にしていくことを確め合った。又，年間各教師が１ないし２回程度行う研究授業の授業過程の設計の際も，上記の授業設計の視点を頭に入れ設計し，授業研究をしてみようということになった。それ以来，研究授業の研究会の折りには，上記の授業設計の視点で反省や討議がなされるようになった。

このような過程を経て，先生方の頭の中には，教師中心の授業から子供の側に立った楽しい学習へと質的な転換を図ることは，急務であり，学習者が「わかった。」「できた。」「もっと学習したい」と感じるように，学習の充実感を大きくしなければならないという意識が毎日の授業の中でも常に働くようになってきたようである。

2. 小教研音楽指導法研究会の指定の機会をとらえて

昭和５６年度に，市小教研音楽科指導法の研究会場に指定され，最終的には市教委指導係長，原　健先生の指導で「豊かな音楽活動を通して音楽を愛好する心を育てる指導」というテーマでであったが，一言でいえば，子供たちが喜んで，音楽の学習に取り組むための授業過程の研究であり，５５年度からの継続的な研究である。

(1) 研究主題設定の理由

本校の実態調査によると「学校の音楽がすき」と答えた児童は，１年生の９０％から学年が進むにつれ漸減の傾向が見られた。このことについて検討したところ，まず，児童については学年が進むにつれて理解や技能の差が大きくなり，学習についてゆけなくなった者が興味を失うということが明らかになった。だから教師の指導を改善していかなければならないという反省がなされた。すなわち，教師と子供が一緒になって心の通う音楽活動を充実し，音楽を愛好する心を育てる必要にせまられた。

そのため，学習指導に当っては，教師中心の授業から子供の側に立った学習へと質的な転換

を行うとともに，児童の自主性や積極性を高めるためにより多くの活動の場を与える工夫をして，「わかった。」「できた。」「もっと学習したい。」という学習に対する充実感を持たせるようにしなければならない。

以上のようなテーマのもとに，低学年ではリズムの聴取や表現を，中学年では旋律の聴取や表現を中心に研究を続けた。音楽科の学習指導の過程でどのように工夫すれば，子供達が，主体的に楽しく学習するかということで，仮説を立て，授業を行い，授業研究をし，又授業を通して改善し，下記のように到達した。

(2) 指導過程の工夫

ア．音楽科の導入においては

児童に対する動機づけ興味づけの段階とした。歌唱曲への導入は既習教材や児童が聴いたことのある教材を用意し，児童が歌いたい聴きたいという気持ちになるような配慮をした。また，レコード・拡大楽譜・リズム譜・絵・歌詞カード・テープ等の準備をして，児童が意欲的に取り組もうとする気持を盛り上げるようにした。更に，楽しい雰囲気づくりをするために，身体表現を多くさせ，体で感じて歌い音楽にのる楽しさを味わわせるようにした。

イ．目標の把握

教師は目標を明確にして，この教材でどういう能力や態度を養うか，本時の中核をなすものは何かを十分な教材研究をしておさえた。また，同時に児童には学習の目あてを必ず分からせるようにしてから授業に入った。

ウ．学習形態の工夫について

(ア) グループ学習を大切に

積極性や自主性を育てる一つの手立てとして，児童相互で模索したり協力したりして発見や興味を見い出させるようなグループ活動を多く取り入れた。グループ活動においては，分担して行う活動は個を育てる学習につながり，互いの協力や情報交換は一斉学習を充実させる基盤になると考えられる。

特に，グループ学習をさせる際，教師は教材研究を十分にし，ねらいや方法を明確にふまえて，指導していく必要があった。また，グループ活動においては，約束ごとやリーダーの育成にも配慮しなければならなかった。

(イ) グループの発表

児童の意欲を育てたり創意工夫をさせるところであり，感動の大きい充実した活動の場にしたいと考えた。歌唱や楽器演奏においては，曲想を感じて演奏すること，強弱や速度，ハーモニーなどについてグループごとに工夫させ，生き生きとした意欲的な学習活動が展開されるようにした。鑑賞する側も観点をもって発表を聴くという点に留意させ，自分のグループと他のグループの成果を比較して，よりすぐれた表現に高めたり認め合い満足感をもたせたりして，向上しようとする意欲につなげた。教師の賞賛や助言は，児童の自主的な活動を伸ばす上で非常に有効である。

(3) 表現に必要な基礎的な指導

子どもたちが喜んで音楽の学習に取り組むためには，ハーモニカ・笛・カスタネット等楽器の扱い方の演奏についての基礎的なことや歌唱の基本なども十分大切に指導し，一回の一斉指導では学習が成立しない児童へは個別指導の手をさしのべるなどして，児童に「できる」喜びを持たせるように努めた。

(4) 評価について

評価は事中に活用されてこそ，効果が大と考えた。活動の節々で，あるいはグループの発表の中などで行い，即時次の活動や学習に生かすようにした。

(5) 研究成果と課題

ア．児童に見られた成果

(ア) 児童の音楽に対する関心が高まり，歌唱においては，曲想を感じて歌うようになった。楽器の演奏も進んで取り組むようになり，笛・ハーモニカ・カスタネット等基礎的な楽器の演奏が身についた。

(イ) リズム感が身についてきて，身体表現への取り組みが意欲的になった。

(ウ) 楽器演奏の際など全体のバランスを考えて，演奏したり，分担を決めたりするようになった。

(エ) 友達の発表を聴いて，意見や感想を積極的に話し合えるようになった。

(オ) グループ活動の場で，他のグループの良い点を認めたり，友だちと教え合う様子が見られた。

(カ) 学習時における約束ごとが守られ，学習の効率が高まった。

(キ) 朝や帰りの会や全校合唱等で多人数で作る音楽の美しさ楽しさを味わうことができるようになった。

イ．教師側に見られる成果

(ア) 教師中心の授業から子供側に立った学習指導へと質的な転換を図らねばならないと常に意識が働くようになった。

(イ) 意欲的に学年相互で教材研究に取り組み，指導過程でいろいろな工夫を取り入れるようになった。

(ウ) 指導の効果を高めるために，教育機器や自作資料を活用したり作成するようになった。

ウ．今後の課題

(ア) 児童・教師とも上記のような成果が見られたが，さらに，指導過程で色々な工夫をしていくとともに，今までの成果や資料等が十分活用されるよう音楽主任や学習指導主任の配慮が大切である。

(イ) 基礎的な学習も十分成立させるよう今までにも増して全教員で努力していくことが大切である。

(ウ) 音楽の生活化について更に研究し，努力する。

3. 「進んで学習に取り組み，よく考える子どもを育てる」算数科における学習指導の改善

56年度の学校評価の結果から，57年度も，55年度・56年度に引き続き，上記のテーマで，学習

指導の改善を研修することになった。本年度は，55年度から“子供たちが目を輝やかせて生き生きと学習する授業設計の視点（本原稿P 2参照）”をさらに検討して，算数科における上述の趣旨の授業設計の視点を下記のようにいくつかの授業研究をもとに改善し決定した。そして，日常の授業においても，この尺度で授業を行い，反省するなど活用するとともに，年間一教師が1～2回行う算数科の授業において，この視点から全体で，授業反省をし，授業改善の尺度としている。

算数科の授業設計の視点と尺度 のカード

授業設計の視点	尺度 5 4 3 2 1	成果と問題点
① 実態の把握 〔性格・能力・志向・経験・既習知識の把握。（特に，経験・既習知識）〕		
② 具体目標 〔学習のプロセスのねらい，この具体目標で評価し，学習不成立の時はフィードバック。〕		
③ 動機づけ・課題提示 〔興味関心を十分大切にして「あっと」驚くような課題提示，動機づけ。〕		
④ 考える場の設定（既習事項や発想） 〔・考える場の設定。 ・質的にねらいに合っていて，既習事項や発想を大切にしていること。〕		
⑤ 解決の場の設定（活動・受容） ・十分な子供の活動 ・他人の考えややり方を受容させて自分の高揚		
⑥ 基礎的知識・技能の習得（計算力等） ・技能も含めて基礎的なもの		
⑦ 教材・教具の活用		
⑧ 発問・助言・板書・ノート		
⑨ 事前・事中・事後の評価とその活用		

Ⅲ 研修時間の設定

子どもたちが一時間一時間の授業において目を輝やかせて生き生きと主体的に学習に取り組めるようにするには，上述してきたように全教員の意識が重要であるが，同時に，それなりの教材の研究と教材の準備が必要となる。そのため，本校では放課後の時間に，学校として，そのための時間帯を勤務時間内に，下記のように位置づけた。

5校時後の「児童の時間」と「教師の時間」

	児童の時間		教師の時間
月	学級の時間 プログラム委員会・係活動 おくれた子の指導 3：10～3：50	全員拘束でなくともよい。 はやくおわってもよい。	教材研究（個人） 4：00～5：25
火	学級の時間 おくれた子の指導 3：10～3：50	全員拘束でなくともよい。 はやくおわってもよい。	○学級事務・教材研究 ○鼓笛やソフト部の活動もよい。 （4：00～5：00）
水		児童は3：20までに 全員帰す。	現職教育 （3：30～5：25）
木	○1・3週　学級の時間・予備 2週　委員会活動 4週　代表者会 （学年1名の教師が交代で指導し，内容を伝える。） 3：20～4：50	全員拘束でなくともよい。	学年会 ・教材研究の交換 ・児童指導の情報交換 （4：15～5：25）
金	○クラブ活動 3：20～4：05（4月～10月までは4：25まで）		週間行事打合　4：30～5 週案立案　5～5：25

上表のように，放課後の自由裁量の時間と内容については，「児童の時間」と「教師の時間」を取り，「児童の時間」については，わからないまま指導を進めることをできるだけ回避するために，おくれがちの子の指導や児童に基礎的知識や技能が定着するように使っている。「教師の時間」については，月曜日は各教師が分担している教科（一教師3教科くらい）を個々で教材研究し，資料等も準備する。木曜の学年会での教材研究は，月曜日に個人で研究した内容や資料を学年会で披露して，教材のねらいや教材資料の使い方等話し合っておく。そして，金曜日の週間行事打合せの後，自分としての授業案を週案に立案する。実際には，この時間帯に，諸行事が入ったり，出張があったり，作業が入ったりしてかなり不実施の日もあった。殆どの教師は時間外に上記教材研究の時間の延長で，教材研究および準備を行っている。しかし，この位置づけがあるので，この曜日には，ここまで教材研究をしておかなくてはという目安になり授業への準備が，かなりよくなされるようになった。

Ⅳ　成果と今後の課題

1. 成　果

本校の『子どもたちが目を輝やかせて生き生きと学習する学習指導のあり方』の研究・実践は55年度から長期にわたって全職員で模索してきたもので，地味で遅々としているが，全職員が常にこういう学習指導を意識して毎日の授業に臨むようになってきたことは事実である。教材研究時の会話にも「この資料を使った方が……」「こういうプロセスで進めた方が……」子どもたちが楽しく授業にのってくるのではないかなどという会話が，しばしば聞かれるようになった。

子どもたちの授業時の目の輝やきや動作も大へん生き生きとしてきたと思える。時折，隣りの教室からの学習の歓声にとまどうことさえあるようになった。

2. 今後の課題

(1) 職員の転出・転入などを配慮しながら，今まで築いてきた上記学習指導のあり方を維持するとともに，さらに研究を積み重ねていくように，工夫して現職教育を行うこと。

(2) 児童が単に学習が楽しいだけでなく，楽しみながら学力をつけていく方策を細かく考え実施してゆかなければならない。即ち，基礎的な学力も十分配慮しながら，学び方を学ばせる学習を重視していかなければならない。

(3) 現在の本校の部活動担当の先生方は部活動を担当しているために，学級の指導がおろそかにならないようにと，土曜日曜まで返上して最大の努力をしている。しかし，部活動は，少数の子どもに過大な効果を期待しがちになりやすいので，無理が生ずる心配もある。やはり，小学校においては，担任の子ども全員に時間をかけて細かく手をさしのべられる状況を常に設定して置かなければならないので，本校で行っている「児童の時間」を大切にして，おくれがちな子供まで指導を充実したり，教師と子どもの接する時間や教師が見守れる子ども相互の接する時間を充実して，人間的に豊かな児童を育成したい。

(4) 行事・出張等を精選し，先生方をできるだけ，受持ちの子どもたちとじっくり取り組めるようにすることが，非常に大切である。

以上，本校がこれまで標題に掲げたテーマを，全職員が着実に取り組んできた一端をまとめたのであるが，まだまだ，納得のいくところまでは到達していないので，ぜひ，皆様の御指導をいたゞき，さらに，研究と実践を重ねていきたい。

（文責　新井幸子）

評

「ゆとりと充実」の趣旨にそった学習指導への方向づけということで，富田小学校が子どもたちの教育に取り組んでいる具体的な実践の姿を，理科，音楽，算数という教科をとおして，この教育論文集に紹介いただいたことは大変ありがたいことです。

児童一人ひとりが目を輝かせ，毎日の学習に参加するようにしむけるためには，私ども教師は何をすべきなのか，また何ができるのだろうかという考え方や具体的な視点を明確に示しています。

教師中心の授業から子どもの側にたった楽しい学習の転換を図り，子どもたちに「わかった」「できた」「もっと学習したい」という喜びを体験させること，それは教育の本質にかかわる課題であります。毎日の学習指導の中から具体的な問題をとりあげ，研究実践をとおして，共通理解を図りつつ授業の質的改善に努めていることはすばらしいことです。

この研究が，子どもたちにゆとりあるしかも充実した学校生活を送らせることにつながり，今後一層深められることを期待しております。